

行き交う

Transportation

人が行き来し、人が交わり、そして物流があることで、まちが栄え、発展していきます。能登川においても、街道沿いに、また港で、そして駅を中心に物資輸送が頻繁になされ、人々が集まり、人々がにぎわい、さまざまな交流が行われてきました。

湖上交通とともに栄えた能登川

すでに干拓された大中の湖や小中の湖のあった頃、湖辺に接していた集落では、家と川とが一体となっていました。

いまでこそ新しく建て替えられ、見かけることが少なくなった田舟の廃材を使って仕上げられていた家や小屋などの腰板を思い出すだけで、懐かしく感じます。

また集落内の川も車社会と生活の利便から埋め立てられたり、以前の半分以下の幅員になってしまったりと様子が変わってきました。

さて、江戸時代以前より米は、直接領主の米蔵や地頭の蔵に運ぶ以外、湖辺の伊庭港や乙女浜港、福堂港などで集積されて、船で大津に廻送され、蔵元たちによって換金されたそうです。これが「大津廻送米^{かいそうまい}」のいわれです。

当時湖上に活動する船数は、慶長5年(1600)伊庭・常楽寺に50、乙女浜・福堂には20以上あったと言われています。また、慶安4年(1651)には伊庭に所属する船が173あったと言い、『淡海地誌』によれば文化4年(1807)には伊庭で120を数える船が活躍していたそうです。

さて、明治以前より、湖上交通が盛んなときにあって、大字能登川の現在の愛宕神社あたりに能登川港が栄えていました。

明治に入って、港には「琵琶湖汽船」の前身の「太湖汽船^{たいこ}」が活躍し、長浜、八幡、大津方面への物資の集積地となっていました。この頃、港周辺には廻船問屋やはたごが軒を並べ、他郷から能登川へ移住する商人も少なくありませんでした。町内で最初の郵便局(明治35年1902年10月開設)ができたのもそのためでしょう。

また、内湖は湖面が比較的穏やかです

から、小舟でも行き来ができ、それぞれの水路から小中の湖・大中の湖、そして西の湖を通り八幡堀を通って近江八幡との交易も行い、その頃「八幡通船^{はちまんつうせん}」という定期船もありました。

時代は移り行くもので、東海道本線が開通した後は、人も施設も駅前へ少しずつ流れていき、さらに内湖の干拓により湖上交通としての役割は静かに幕を閉じていったようです。



乙女浜の水郷風景(年代不詳)



田舟のある山路川(年代不詳)

呼称が変わる不思議な道路?!

能登川町を南北に縦断する主要地方道大津・能登川・長浜線。この道路を人によっては「産業道路」とか「浜街道」また「松街道」と言ってみたり、「御所街道」あるいは「朝鮮人街道」とさまざまな呼び方をしていますが、これは、時代の変遷とともに呼び方が変わっていったのです。

まず、県道として未整備だったのはか昔、織田信長が安土城築城をした頃、京都まで古道を結んで幹道としたことにさかのぼります。

琵琶湖岸を走るこの道は、「浜街道」とも「下街道」(中山道より湖辺にあったため)とも呼ばれ、京都への最短距離であるため本街道として発達し、豊臣秀次の八幡城下町建設によってより栄え、関ヶ原の戦いに勝った徳川家康がこの道を通して京都に上洛したため天下支配の吉例の道とされたと言われています。

家康が天下をとった後、鎖国時代にあって朝鮮から12回通信使が来日。そのうち10回を江戸に向かう道中、京都から近江に入り中山道を経て途中、野洲小篠原より彦根鳥居本までこの道を通ったそうです。

中山道を途中脇道にそれた理由には諸説があるようですが、徳川氏の吉例の道として代々の将軍上洛のときにこの道を通っていたことや、通信使一行の宿泊や休憩を受け入れるための施設が中山道より八幡や彦根を通るほうが便利だったと考えられています。

このことから通信使が何度となく通る道であり、世の人はこの道を「朝鮮人街道」と名づけるに至ったようです。

朝鮮人街道はよく曲がっていて、朝鮮の使者に日本の国の広さを誇示するためだという俗説もありますが、先にもふれたようにもともと集落との間を行き来する条里地割の畦道や野道を結んだもので、それが安土城や八幡城築城などによって統一ある主要道としたと考えられます。

昔からこの朝鮮人街道沿いには美しい松が並木として連なり、このことから「松街道」とも言われていました。しかしその松並木も第2次世界大戦頃より、戦時中のガソリン代用の松根油にするため伐採され、さらにその道



南須田地先に残る松のある街道風景(平成9年6月)



今付近より垣見をのぞむ(年代不詳)



県道大津・能登川・長浜線(能登川中学校前交差点/昭和46年)

もいまでは彦根・草津間の8号線のバイパスとして名称も「産業道路」と別名で呼ばれ、松自体、道路の拡張や舗装によりほとんど姿を消し、須田地先にわずかに面影が見られる程度です。道路一本にも、さまざまな歴史が感じられます。